

## 第二次世界大戦後の伯刺西爾時報における先住民描写に関する一考察

長尾直洋 (名桜大学)

キー・ワード： ブラジル日本移民史、勝ち負け抗争、伯刺西爾時報、香山六郎、インカ帝国

### A Study on the Representation of Indigenous Peoples in the Burajiru Jihō after World War II

NAOHIRO NAGAO (Meio University)

*Keywords: Japanese Brazilian History, The Kachigumi / Makegumi Conflict, Burajiru Jihō, Rokuro Koyama, The Inca Empire*

本発表は、第二次世界大戦後のブラジル日本移民社会に見られた「日本人と先住民の近縁性」言説に関連して、当時の邦人社会における勝ち組側の先住民描写を分析することで、ブラジル日本移民社会における同言説の全体像の一端を捉えることを目的としている。

近年、ブラジル日本移民史における勝ち負け抗争について、勝ち組側の行動が「ブラジル社会の抑圧に対して日本移民が抵抗した証」[三田 2018:93] と評価されるなど、第二次世界大戦での日本敗戦後のブラジル日本移民の反応について新たな視点が提示されている。

同時代のブラジル日本移民による反応の一つとして、細川周平は移民知識人の香山六郎による日本語とブラジル先住民語のツピ語との同祖論に注目した。細川は、香山による日本語とツピ語の近縁性の主張について「ブラジルの正式な国民のメンバーとは見なされていない日本人が、実はヨーロッパ人よりも先に住む部族の兄弟であるという政治的な含み」[細川 2008:x] を持つ論であると解釈した。細川は香山論の社会的影響力を否定したが、発表者は香山著書の流布状況、当時の邦字新聞における香山論の発信について確認することで、その社会的影響力への再評価を行った [長尾 2022]。

先住民への関心は香山のみが持っていたわけではない。例えば、香山論が発信された同時代のブラジル日本語新聞紙上では、しばしば先住民関連の記事が掲載され、その中には日本人と先住民の近縁性に触れたものも存在している。発表者によるこれまでの調査では、香山論を含めた日本人と先住民の近縁性描写が主に負け組側

言論空間にて見られたことを確認している。本発表では、これまでの調査を踏まえて、香山論に反応を示さなかった勝ち組側言論空間における先住民描写を抽出し、日本人との近縁性を含めて、その属性を分析した。

勝ち組側言論空間として、現時点でまとまった所蔵が確認されている伯刺西爾時報を選択し、1946年12月の再刊から1947年12月までの1年間を本発表での分析対象とした。調査の結果、同期間中に計82の先住民関連記事を抽出することができた。内訳としては、ブラジル国内の先住民関連記事が24、ブラジル国外の先住民関連記事が58である。国外先住民関連記事については、ペルー先住民関連のものが52と大半を占めるため、ペルー以外のブラジル国外、ブラジル国内、ペルーと三種類に分けて、それぞれの先住民描写を分析した後、肯定的、否定的、無属性に分類した。

ペルー以外のブラジル国外の先住民については6記事(9描写)あり、肯定的2、否定的2(5描写)、無属性2となった。肯定的属性としては健康、漁労での優越が示され、否定的属性としては、遅れた文明、野蛮性が示唆されている。

ブラジル国内の先住民については24記事あり、肯定的13、否定的5、無属性6となった。肯定的属性としては、第二世向けの記事においてブラジルの起源、ブラジル独立の協力者などの描写が見られた。また、土地広告や屋号などで先住民イメージが肯定的に用いられている。否定的属性としては、無知、獐猛、無進歩、貧弱といった描写がなされた。

ペルー先住民について扱った52記事には、日

本人との近縁性を示す記事が複数見られたため、分類項目として肯定的、否定的、無属性と共に近縁性を加えた。分類の結果、肯定的 28、肯定的・否定的 2、肯定的・近縁性 20、無属性 2 となった。これらの記事群は、戦前日本で出版された著作が分割連載されたものである。その論旨は日本人とインカ帝国の人々との近縁性の主張に置かれていたため、近縁性に関連する記事が多くを占めることになった。肯定的属性としてはインカ帝国の文化水準や道德観等が列挙されている。肯定的・否定的属性として、単体としては優れているが、スペイン人征服者と相対した際に敗者としての描写が見られた。肯定的かつ近縁性を示すものとしては、南米先住民起源に関する諸説など日本人とインカ帝国との相関性を示す当時の学説の援用、言語や事物の類似などが挙げられる。

これらの分析をまとめると、ペルーを除いたブラジル国外の先住民については否定的描写がやや強い傾向にあるが、ブラジル国内の先住民に関しては、特に第二世向けとして、肯定寄りの描写がなされていたといえる。ペルーの先住民（インカ帝国）については、肯定的かつ日本人との近縁性が強く主張されており、当時の読者層へ南米先住民と日本人の近縁性を強く示唆した可能性を指摘できよう。

本発表を通して、第二次世界大戦後の勝ち組側言論空間における先住民描写の属性の一端が明らかとなった。特に、日本人と南米先住民の近縁性が連載記事を通して繰り返し発信されていたことを示した。今後は、これらの先住民描写が持つ社会的意味について考察を進めると共に、分析対象の範囲を拡大することで、ブラジル日本移民社会における日本人と先住民の近縁性言説の全体像を捉えたい。

#### 【主要参照文献】

長尾直洋、2022、「香山六郎による日本語・ツピ語同祖論の社会的影響に関する一考察：ブラジルにおける日本語新聞を中心に」、『名桜大学紀要』、27:29-41。

細川周平、2008、『遠きにありてつくるもの 日

系ブラジル人の思い・ことば・芸能』、みすず書房。

三田千代子、2018、「ブラジル近代史の一頁としての『シンドウレンメイ事件』」、『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』、12:87-100。